

リズムに関する現象学的考察の試み

——リズム論に基づく教育学的人間理解に向けて——

遠藤 野ゆり

はじめに リズム論研究の必要性

人間のある言動をとりあげて、なぜそのようなことをしたのか、理由や背景や要因を考える試みは、しばしばなされる。現象学的に述べればそれは、人がその可能性を実現したのはなぜなのかを考える、という試みである。すると、理由や動機づけや意志といった、その人の能動的な選択で説明したあとにも、依然として疑問が残る。それは、いったいなぜそのような能動的な選択がなされえたのか、という問いである。

能動的な行動であれ従属的な行動であれ、それを可能にしている何かとはなんなのか。このことを理解することは、人間の言動を含めた在り方を理解するうえで不可欠であろう。本稿では、それを可能にしている何かとは、人にそなわる「リズム」ではないか、という仮説を立てて論を進めることにする。

リズムという仮説が成り立つのは、何よりも、素朴な経験による。私たちは人間関係において、相手と「波長が合う」「合わない」といった経験をする。これは、誰を友人として選ぶかという意志的な選択に先立つものである。素朴な経験としては、友人は選ぶのではない。出会い、共にいる中で、いつのまにか友人になるのである。波長が合う、合わないという経験の中で、おのずと友人関係が形成されるのである。あるいは、個人的な活動に目を向けてみよう。休日が続き、生活リズムが崩れてしまうことがある。そうすると、朝のうちに起きたり、家事をしたり、翌日の仕事の準備をしたり、眠ったりといった、普段ならば苦も無く営める日常の活動が、なぜかこなしにくくなる。

スポーツをしていても、そうだ。筆者の経験でいえば、ジョギングの初めの1、2キロメートルは足取りが重く、心拍数も上がり、早く終えたいと思うのに、数キロ走ると、走るリズムが自分の中に生まれ、自然に足が前へ前へと出ていくようになる。体は疲労しているはずだが、スピードはむしろ速くなり、ずっと走り続けていたいような気持ちにさえなる。このように、リズムは、私たちの日常生活のいたるところで機能し、私たちの言動や在り方をスムーズに動かしていったり、その中で関係を深めていったりすることを促進している。

そこで、リズムこそが私たちの顕在的な活動の背後にあって、その活動を促進してくれている諸要因の一つである、という仮説に基づいて、本稿では、次の点を試験的に考察したい。一つは、そもそもリズムとは何かということ、もう一つは、人間のリズムとは何か、ということである。そして、それらの試みをもとに、人間の在り方をリズム論で捉えることによって見えてくるものが何なのかを、考えたい。

リズムとは何かについて考えるためには、先達の論をまず学ぶことにしたい。そしてそれをもとに、教育学研究において解明の対象となる、人間のリズムとは何かということについては、筆者の体験をもとに論じたい。

1 リズムとは何か ～リズム論の検討～

リズムとは何か。この言葉の射程範囲はどこまでであり、具体的に何を指すのか。リズム研究においては実は、それ自体を定めることがまず難しい。その難しさについて、山崎は次のように指摘する。すなわち、リズムは人を高揚させた眠りに誘ったりするが、それは一種の陶醉感であって、意識の覚醒とはむしろ逆のものであるために、意識について論じる哲学にそもそもなじみにくい (cf. 山崎, 2018 p.30 以下)。逆にいえば、それほど難しいからこそ、多くの先達がこの謎の解明に挑んできた、ともいえる。そこで、本稿ではまず、長い哲学の歴史の中でリズムはどのように捉えられてきたのかを概観したい¹。

1 本稿におけるリズム論の概観に関しては、日仏哲学会2020年春季・秋季合同大会のシンポジウムⅡ (秋季)「リズムの哲学:ソヴァネ、バルクソン、マルディネ」における、沢谷尚一氏、および藤田尚志氏の発表を参考にした。

1-1 ルソーのリズム論

リズムについて言及している哲学者の一人に、ルソー（Rousseau）がいる。ルソーはリズムを主題的なテーマとして論じているわけではないが、草稿『言語起源論』では、言語の歴史を考える際に、リズムについても言及している。この草稿においてルソーは、原初的な言語を重要視し、イタリア語やギリシア語といった南欧の言語の方に、より人間の本質が表現されており、北欧などに言語が拡大することによって、言語の本質が失われていった、と捉えている。そして、原初的な言語について、次のように述べる。

「自然の声は分節されないので、[そのような原初的な言語の] 語は分節が少ないだろう。…²自然のものである声、音、抑揚、階調は、協約によるもの [=人為的、制度的なもの] である分節が働く余地をあまり残さず、人は話すというよりは歌うようなものになるだろう。語源となる語はたいてい模倣的な音で、情念の抑揚か、感知可能な事物の効果 [の模倣] であるだろう。[そのような原初的な言語では] 擬音語が絶えず感じられるだろう。」（ルソー,2016,pp.30-31）³

ルソーはこのように、原初的な言語は抑揚や擬音を通し、また分節化されることのない形で働いていた、と考えている。そのため、言葉の本来の機能を果たすのは文字による表記ではなく、話すことである、とルソーは捉える。なぜなのか。「話をする人は調子によって意味を変え、意味を好きなように決める」（同書,p.39）ことができるからだ。そして、この「調子」こそ、リズムに関連すると考えられる。音には調子があり、「抑揚のある言語では言語の力強さの大半をもたらすのはあらゆる種類の音、抑揚、高低である」（同書,40）。ルソーは、こうした抑揚や高低といった声の調子、リズムが、「普通の文を、その場だけに適したものにするのだ」（同所）と指摘する。それゆえ、声や抑揚によって、言葉はその場にしかない意味をもつものになる、といえる。

2 引用文における「…」の表記は、省略を意味する。

3 ルソー（2016）からの引用における〔 〕内の補足は、邦訳者による。

こうした調子をもたらすのは、語り手の感情である。感情がもたらす言語の調子について、ルソーは次のように語る。

「その付随する感情によって、抑揚はより頻繁になったりまれになったりし、変化は高かったり低かったりする。そのように拍子や音は音節とともに生まれ、情念はすべての器官を語らせ、その輝きすべてをもって声を飾る。〔略〕リズムの周期的で律動的な回帰、抑揚の旋律豊かな変化は、言語とともに詩と音楽を誕生させた、というよりその幸福な時代と幸福な風土ではそれらすべてが言語そのものだった。」(同書,p.90)

つまり、本来人間は情動の表現として音楽を奏で、その音楽は声、音、リズムなどによって話すことと同じであった、とルソーは考える。いわく、「音声言語の多彩な音以外に旋律はなく、抑揚は歌を形作り、音長は拍子を形作り、人は文節や声〔母音〕によってと同じくらい、音とリズムによって話していた」(同書,p.91)。またルソーは、「感情やイメージを表現するには、リズムと音すなわち旋律が必要である」(同所)と述べ、リズムの働きを明確に指摘する。

ルソーのこれらの記述からは、人が自分の情念を伝えるためには、音としての言語が重要であり、その情念を伝えるものとして、音程や旋律などに加えて、抑揚といったリズムが重要である、と指摘できる。

ただし、ここの記述からだけでは、ルソーがリズムをどのようなものとして捉えていたのか、特に、拍や調子といった近接概念とどのような違いを見ていたのか、明確にならない。この点について、馬場は、『言語起源論』の前段階とされる草稿『旋律の原理』に基づき、以下のように解説している。

「原初の言語は『アクセント』と『リズム』にとんだ言語であった。そして、旋律固有の力動的な時間性はこの『アクセント』と『リズム』から直接構成される。まず『アクセント』は、母音に代表される非分節音の様々な音高とその強弱そして音節の長短とを同時に内包する。無論、言語とは孤立した語のみで構成されるものではなく、複数の語が一体化し語り(discours)として時間的に展開されることを前提とする。『アクセント』

に内包される音高と強弱が水平方向に組織化されると同時に、『アクセント』のもう一つの契機である音節の長短がまず『拍子』そしてその組み合わせとしての『リズム』に組織化され、一つの形としての旋律が形成されるのである。」(馬場, 2000, pp.93-94)

馬場の考察に基づく、ルソーにおいてリズムは拍子の組み合わせであり、それはアクセントがもつ音節の長短の組み合わせである、といえることになる。ルソー以降、リズム論を探求するうえでは、リズムと近接概念の区別とが常に問題になるが、ルソーにおいては、アクセントと拍子とリズムとが、こうした包含関係でとらえられている。

1-2 クラーゲスのリズム論

上述したように、ルソーは、アクセントに内包される音節の長短すなわち拍子の組み合わせとしてのリズムが、語り手の情念を伝えるものとして機能する、と指摘する。ただし、そこで取り上げられているリズムは、ルソーの探求における主題的なテーマとはいえない。リズムそのものを主題的に取り上げた哲学者として、クラーゲスがいる。

クラーゲス (Klages) は、リズムについて、次のように述べる。「リズムは—生物として、もちろん人間も関与している—一般的生命現象」である。(クラーゲス, 2017, p.21)。また、「音や響きはわれわれの心を力強く動かすことができ、よってそれ自体動的なものであり、それゆえ必然的にあらゆる運動の舞台、すなわち空間を現象せしめる、というわれわれの確信を強めさせる。したがって、音響のリズムは時間現象を分節するのみならず、さらに、生命力のみならずの交替運動で満たすことにより、空間現象をも分節する」(同書, pp.69-70)。

リズムそのものを主題的に論じるクラーゲスは、リズムと、その近接概念、例えば「拍子」との違いに注意を払い、次のように述べる。リズムが一般的生命現象であり、他方、「拍子はそれに対して人間のなすはたらきである。リズムは、拍子が完全に欠けていても、きわめて完成された形であらわれうるが、拍子はそれに対してリズムの共働なくしてあらわれえない。」(同書, pp.21-22)。

ここには、リズムは拍子に優越する、というクラーゲスの考えが見てとれる。

そして、拍子とリズムの違いについてのクラークスの記述から、リズムとは何なのか、私たちは一つのヒントを得る。すなわち、「拍子が同一者（das Gleiche）の反復（Widerholung）だとするならば、リズムは類似者（das Ähnliche）の再帰（Widerkehr）だといわねばならない。……拍子は反復し、リズムは更新する」（同書,p.57）のである。

リズムは、私たちがそれをリズムだと捉えることができるような、ある種のまとまりを備えている。もしも一切のまとまりがなくただバラバラのものが前に進むだけであるならば、どのような音声効果も視覚効果にも、リズムは感じられない。

ただしそのまとまりが、他のまとまりと完全に同じものであり、二つ目は一つ目の反復（Widerholung = 再び持つてくること）でしかないならば、リズムというよりも、それは拍子に過ぎなくなる。同じまとまりの繰り返しかと捉えることができつつも、少しずつ変化しながら、再び返ってくること（Widerkehr = 再びやってくる）が、リズムの成立要件だ。クラークスは、このように考える。

1-3 ドゥルーズのリズム論

フランスの哲学者、ドゥルーズ（Deleuze）も、リズムについて論じている一人である。ドゥルーズは、クラークスと同様に、拍子やテンポといった近接概念とリズムとを峻別し、以下のように述べている。

「リズムとはもちろん拍子やテンポのことではない。たとえ拍子やテンポが不規則でも、リズムは拍子やテンポとは違うのだ。…なぜなら、拍子とは規則的、不規則的の別を問わず、必ずコード化された形式を前提とするものであり、この形式の測定単位もまた、仮に変化することがあるとしても、結局は疎通性のない環境内にとどまるのに対し、リズムのほうは常にコード変換の状態に置かれた<不平等なもの>、あるいは<共通尺度をもたないもの>だからである。拍子は断定的だが、リズムは批判的クリティカルであり、臨界的な瞬間を結びついたり、環境から環境への移行にみずから結びついたりする。」（ドゥルーズ,2010,p.323）

ドゥルーズにいわせれば、拍子やテンポは、規則正しいかどうかの別によらず⁴、より形式的なものであり、そうであるがゆえに、その内部に限定的にしか作用しない。他方、リズムは、変換の中にあり、自由であり、それゆえ、その内部にとどまらず、外に出て行くことができる。

ルソー、クラークス、ドゥルーズにおけるこうしたリズム論から、リズムについては次のように整理することができる。一つは、リズムは、完全に同一ではなく、可変性に関わながらも、ある種のまとまりとして捉えられるようなものであり、変化しつつも繰り返されることによって、リズムとして捉えられるようになるということ、もう一つは、近接概念としての拍子がまとまりごとの同一性を備えるのに対し、変化を含んでいるリズムは、それゆえに、そのリズムの外部へと出ていくことができるということである。ドゥルーズのいう「環境から環境への移行にみずから結びついたりする」という点こそ、ルソーが、原初的な言語においてはリズムによって情感が伝わると指摘している点であろう。

1-4 ソヴァネのリズム論

これらをふまえたうえで、依然として、リズムとは何なのか、その射程範囲は不明さが残るままである。この点について、ベルクソンをはじめとする多数の哲学者が多く議論をしているが、本稿では、紙幅の関係上、ベルクソンのリズム論も含めて検討している、ソヴァネ (Sauvanet) の記述に即して検討したい。

ソヴァネは、「“リズム”という現象は、いつもリズムカルである」(RR, 1/97)⁵と述べ、リズムは現象である、とする。つまりリズムは、「消えたり現われたりする」のである (RR, 1/157)。

さらに、リズム論の歴史を概観したうえで、リズムには三つの基準がある、

4 この点でクラークスとドゥルーズにおける拍子概念の差異が見て取れる。

5 以下、Sauvanet,2000からの引用は、「PR,1/」の後にページ数を入れることで、引用個所を示すことにする。

と指摘する。それは、構造と、周期性と、運動である。ソヴァネはこれらはそれぞれ、S,P,Mと頭文字で表記する。

ソヴァネによると、リズムの第一の基準は、構造 (S) である。音楽を例にとると、構造は、持続 (duree)、強度 (激しさ)、音色、音程 (音の高さ) という4つの要素である (cf. RR, 1/168)。これらの諸要素がうまく配置されることによって音楽は「構造化された(structuree)」、つまり「形象となった“figuree”」「図式となった”figuree” (RR, 1/167) 音楽となる。「構造はリズム現象にそれ自身の輪郭 (形状) を与える」(elle est le motif qui lui donne sa configuration propre) (RR, 1/167) のである。

第二の基準は周期性 (P) である。「周期性とは、等間隔における同じ現象の繰り返し」(RR, 1/179) と定義され、具体的には、「循環 (des cycles)・回帰 (des retours)・交替 (des alternances)・反復 (des repetitions)・調子 (des cadences) として知覚あるいは思考される、諸リズムの全体を含んでいる」(RR, 1/177)。身近な例で考えてみると、「13時が1時になるようにさせてくれるもの」(RR, 1/177) が周期性である。つまりリズムとは、一般的には、再びやってくるもの、戻ってくるものことだ、とソヴァネはいう。ただし、周期性があればリズムとなるのに十分だというわけではない。周期性はリズムをなすひとつの構成要素であって、リズムそのものではないということである (RR,1/183)。このことは、以下の第三の基準と密接に関係している。

第三の基準は運動 (M) である。運動は、ギリシア語のメタボレー (metabole) と関連づけられている。メタボレーが意味するのは、例えば、「性格としての服装や、政党としての状況が、移動すること (deplacement)、変化すること (changement)」であり、「メタボレーはつねに、移行である」(RR, 1/189)。運動について、ソヴァネは次のように記述する。「運動は、構造を具体化し、また／あるいはそれぞれの繰り返しにおける終わりを再び生み出すが、それは、リズムが同時に他のものでありながらも常にそれ自身であるというような仕方で、である。運動は、同じものの他なるものであり、それは他なるものでありつつも同じであるようにさせるものである」(RR, 1/190)。また「リズムであるということは、今まさにそうなりつつあるということである (L'être du rythme est son devenir)」(RR, 1/190)、という。最後のこの言葉こそ、リ

リズムの捉えにくさそのものを表している、ともいえる。

ソヴァネによるリズム論の整理から、私たちは、次のことを学ぶことができる。すなわち、クラークスが、類似者の再帰と呼ぶリズムは、類似と呼ぶことを可能ならしめる「構造」を備えているということ（そしてその構造は、時間的なものであれ空間的なものであれ、リズムがある場合には構造としてあるということ）、それらが構造として捉えられるのはそれらが「周期的に」繰り返されるからであるが、同じものが繰り返されるのではなく、それを変化させる「運動」によって、同じものの別の形になりつつあるという形で変化しながら繰り返されるということである。

また、リズムの構成要素として、周期性や運動は理解しやすいのに対し、構造とは何かを具体的に捉えるのは難しいことも、少し考えを巡らせてみるとわかる。いってみれば、リズムの捉えがたさは、リズムの構造とは何か、という難題から来ていると考えるべきであろう。

ソヴァネは、先に引用したように、「構造はリズム現象にそれ自身の輪郭（形状）を与える（*elle est le motif qui lui donne sa configuration propre*）」と述べている。では、「形」とは何なのか。

ソヴァネは、しばしば音楽を例にとりながら、拍子とリズムについて論じている。例えば、持続について、ソヴァネは、長さや短さを定量的に規定しようとする実験心理学を批判する。ここからは、リズムが、量的ではなく質的なものであることが示唆される。しかし、依然としてリズムにおける構造が何なのか、具体化されていない。

本稿は、人間に備わるリズムを捉えようとする試論である。リズムは音楽に限るものでもなければ、音声学に限るものでもないことは、ソヴァネ自身言及しているとおりである。ソヴァネは実際に、視覚的なもの、民俗学など、様々な「音声的でないもの」に関するリズムも論じている。例えば、「今や、これら4つの構成要素（持続、強度、音色、音程）のそれぞれは、視覚構造、視角モードそれ自体の空間性、すなわち、寸法、強度、素材、色に、類似性を見出すのではないのか？」（PR,1/174）。このように、音声的なものにおける時間性に対応する空間性にも、リズムの構造の要素が見て取れる。「これは偶然生じるのか？」とソヴァネは問い、自ら答える。「おそらくそうではない」

(PR,1/174)。

ソヴァネのこの悩ましい言い回しは、人間におけるリズムそのものを明らかにしようとする本研究において、次のような誘惑を提示する。人間のリズムもまた、音声的なものや視覚的なものの四要素に対応するような四つの要素を備えているのだろうか。そこで、次章では、筆者の具体的な体験に即しながら、この点を考察したい。

2 人間のリズム

人間のリズムについて考える際に考慮すべきことの一つに、人間は、音声的なものであると同時に視覚的なものである、という点がある。特に他者のリズムは、直接的には、聴覚と視覚をとおして伝えられる。すると、音声的なリズムの構成要素と視覚的なリズムの構成要素の両方が感じられるのではないだろうか。

このことを念頭に置きながら、素朴な経験を手がかりにして捉えられる範囲において、人間のリズムの要素を洗い出していこう。

2-1 私の中にあるリズム

最初に、自分自身のリズムについて自分自身では何を感じしえるかを経験に即して捉えてみたい。

1) 内的なリズム

本稿冒頭にあげた、生活リズムを例に考えてみよう。私たちは、24時間周期で回っていく日々のサイクルを、周期性のある、類似的な日々の再帰のリズムとして感知している。この24時間周期の中には、朝は起き諸活動を始める時間、昼は体を一時的に休めまたエネルギーを補充する時間、夜は諸活動を終息さ休息に入る時間というように、いくつかのまとまりがある。このまとまりで生きることが日常化している人にとって、例えば朝寝坊をすることは、諸活動の時間を単に後ろにスライドさせるということにはならないし、起きた時刻に本来している活動へとすぐに身を投じることもなりにくいであろう。個人差が大きいだろうが、仮に急いで本来の仕事に向かったとしても、

何か調子の悪さを覚えたりすることも多いのではないだろうか。このように生活のリズムは、諸活動の時刻的な位置づけという点でも、順番という点でも、諸活動の遂行のしやすさに関わってくる。

リズムは、24時間といった長期的な周期でのみ回るのではない。例えば原稿を書いているときにも、リズムになかなか乗れないときもあれば、筆が次々に進むこともある。何を書こうとしているのか、何に向かっているのか、自分でもつかめないとき、あるいは、ゴールは遠くに見えていても、その途中の道筋が見えないとき、その逡巡の過程では、世の中にあふれる意味を帯びない膨大な言葉の中から言葉を選び、つないでいく。この作業は、低酸素下で運動をするような息苦しさがあり、無理やりに何かを行っているような重苦しさがある。ところが、自分が次に書きたいと思って向かうものが一度見えてくると、言葉は自分の内側から湧いて出てくる。言葉を選択するという行為自体を後押しするかの如く、選ぶべき言葉が向こうから自然に流れてくる。その言葉を選び取る勢いが、次の言葉を運んでくる。このようにして、言葉は自然に、次から次へと紡ぎだされていき、言葉を選ぶ私の行為はリズムを帯びる。このように、諸活動の一つひとつをとっても、その中にもまたリズムは生まれる。

したがって、私たちの内的なリズムには、次のような仮説がたつ。私たちは長い周期性のある諸活動の中で、それより短い周期性の活動を行い、さらにそれより短い周期性の活動を行うというように、規模の異なる周期性の入れ込構造の中で動いており、この入れ込構造がリズムの周期性として働いている。そしてこの周期性は、いつも同じように働くとは限らず、状況に応じて変質するものだといえる。リズムに乗る、つまりリズムが次々と生み出されていくような変化においては、ソヴェネがいうところの運動が生じているのに対し、リズムに乗れず、むしろ停滞していくときには、リズムそのものが崩壊していく、と捉えられる。

2) リズムに乗る

リズムが次々と醸成される経験についてさらに検討するために、次に、自分自身の内的なリズムに乗るのではなく、外なるリズムに自分を合わせてい

く、という経験について考えてみたい。

私は音楽に耳を傾け、その音楽から伝わってくる波に合わせて、自分の体を少し動かす。ゆるやかに上体を揺らしたり、つま先で拍を取ったりする。音楽のリズムの変化に合わせて、意識せずともその振動の仕方は変化していく。音楽を聴いていると、同じ4分間でも、あっという間に過ぎるときもあれば、かなり長く感じられることもある。あっという間に過ぎる4分の間、音楽のリズムは私のリズムと調和し、次になる音は私は、まさにすでに受け取っていたかのように受け取る。あらかじめ受け取るべくして用意されていた音を受け取るような感覚がある。他方、長く感じられ4分間、音楽のリズムと私のリズムはバラバラになっている。

こうした経験は、音声的なものだけでなく、視覚的な要素も組み合わせることによって、より明確になる。例えば、フィギュアスケート等のように、音楽に合わせて競技者が身体を動かし技を競うスポーツの演技を見てみると、選手の動きと音楽とが完全に調和しているときには、見ている側は、音楽だけを知覚しているとき以上に、そのリズムのなかに巻き込まれ、アスリートと共にその音楽を演奏しているかのような一体感を味わうことになる⁶。こうした一体的調和において、次の音は見る者の呼吸の中にすでに取り込まれている、という形で鳴り響く。

こうした経験から明らかになるのは、次のことである。人は、自分の外側で脈打っているリズムに乗る際に、自らの呼吸やリズムのなかにそれらを取り込むのであり、内なるリズムは、外のリズムの影響を受けて変化しうる、ということである。リズムの変化はこのように、外なるリズムの影響を受けることで、より生じやすくなるであろう。

またこのことから、私たちは能動的にリズムに身を任せるばかりでもなければ、外のリズムに従属的に従う受動的な状態ばかりでもない、ということが指摘できる。音楽のリズムに合わせているはずが、気づけば自らがその

6 ベルクソンは、ダンスとそれを見る者とを例に、「リズムと拍子のおかげでダンサーの運動がよりよく予見されるために、今度はわれわれ自身がその運動の主であるような気がしてくる」(ベルクソン,2002)と述べている。

音楽のリズムを自分自身の内側に鳴り響かせているというように、能動と受動の境界で、リズムは私たちを動かすように見える⁷。

2-2 他者のリズム

私が私の内なるリズムを備えて、リズムに乗りながら生きているように、他者もまた、他者に固有のリズムを備えて生きている。それゆえ私たちは、内なるリズムと、外なるリズムの一つである他者のリズムとの、共鳴や反発を経験することになる。

他者のリズムは、自分のそれとうまく共鳴せず、不快な不協和音となるときに、より強く意識されるであろう。そこで、そのような例を挙げながら、人間のリズムの要素を探っていききたい。特に今回は、発達的な特性のある高校生と筆者とのやりとりから考えたい。というのも、特性のある者とのリズムの呼応に、筆者自身はしばしば、ひっかかりのようなものを覚えるからである⁸。その要因を医学的に考えれば、発達的な特性の中には、ワーキングメモリーや処理速度など、人間のリズムに関わる要素があるからかもしれない。

本章で述べるのは、発達的な特性のある子ども向けのある高校での、生徒とボランティアである筆者のやり取りのエピソードである。生徒の発達特性は多様で、何らかの障害の診断を受けている者もいれば受けていない者もいる。

1) テンポの違い

リズムのかみ合わなさを実感しやすい例として、言葉を発したり活動を行ったりする際の、速度の違いが挙げられる。そこで、筆者とは言動のテンポが大きく異なり、いつもおとなしく、話しかけるとワンテンポ間があってから

7 能動でも受動でもないこうした人間のありようを、國分は、「中動態」と表現している（國分,2017）。リズム研究においてはこの中動態という在り方が重要概念になると考えられるが、この検討は、今後の課題としたい。

8 当然のことながら、特性がある人との呼応関係にのみひっかかりを覚えるわけでもなければ、特性のあるすべての人にひっかかりを覚えるわけでもない。本稿ではあくまでわかりやすい典型例として、取り上げたい。

返事が返ってくる、沢谷さん（仮名）との会話の場面を考えてみたい。

自習中、沢谷さんは隅っこの自分の席で、静かにワークに取り組んでいる。沢谷さんは私の担当の生徒ではないが、彼女の背中からは停滞したムードが漂っており、なんとなく気になって、「今何してるの?」と背後から尋ねた。沢谷さんは驚いたように振り返り、私を見上げ、「あ、英語です」と小さな声で答える。「ふーん、何をやるの?」と私は問いかけ、そのまま自分で、「あーこれか、教科書から単語探すのね、なるほど、それでそれをここに打ち込むのね⁹」と合点してしまう。沢谷さんは、私の言葉の後に一瞬の間をおいて、「あ、はい、そうなんですけど…」とおずおずとつぶやく。何かに困っている様子を察し、「[単語] 見つからないの? これ、何ページ? あ、20ページ、ここか、開いてるとこだね」と私はまた一人で合点しながら話を進めてしまう。問題文を読むと、彼女が探すべき単語は、新出単語一覧の冒頭に目立つように載っている。和訳も載っているのだから、これが探し出せないのかなといぶかしく思いつつ、「これは? この単語だよ、ここに打ち込んでみて」と解答欄を私が示した。沢谷さんは、「あ、はい…」とつぶやくものの、打ち込もうとしない。早く打ち込んでごらん、という言葉を読み込んで、沢谷さんの言葉を待っていると、しばしの沈黙のあと、「さっき、[この単語] 入れてみたんですけど…」と、沢谷さんはゆっくりと説明を紡ぐ。「だめだったの?」「…あ、はい、なんか、バツって、出ちゃって」、と沢谷さんの言葉は続く。

上記の場面で、沢谷さんと筆者のテンポの違いは明らかだ。「何をやるの?」という筆者の問いかけに対して、沢谷さんが答える前に、筆者は作業の内容を自分で見つけてしまう。さらに、教科書の該当箇所についても、沢谷さんに質問しておきながら、沢谷さんの答えの前に合点してしまう。会話が、相互的に言葉を発し合うものだとすれば、ここには会話は成立しておらず、その居心地の悪さから、筆者は自分の言葉を途中で飲み込んで、沢谷さんの言

9 この学校では、原則としてパソコン学習が実施されており、生徒は問題を解いて、パソコンで答えを打ち込んでいく方法で勉強している。

葉を待つ、という行動を意図的にしなくてはならなくなる。沢谷さんにしてみれば、筆者のテンポについていけず、困惑するばかりだっただろう。

ソヴァネに即して、この会話におけるリズムの構造を読み取るならば、「問い-答え」という呼応関係を指摘することができる。問いかけは、それ自体で存在しているのではなく、それに呼応する答えに向けられている¹⁰。キャッチボールで投げられたボールが、その速度や上昇角度によって、キャッチされるのにふさわしいタイミングがあるように、問いかけも、答えられるのにふさわしいタイミングがある。そのふさわしさは、問いかけたり答えたりする個々の内的なリズムに依拠しているのであろう。上記の場面でいえば、沢谷さんにとってのこの「問い-答え」のまとまりのテンポと、筆者にとってのそれとが大きく違うために、ここで筆者は沢谷さんのタイミングを無視して会話を進めてしまっているように見受けられる。

ソヴァネによれば、周期性はテンポにかかわる (cf. RR, 1/179) 問題である。沢谷さんと筆者では、問いからそれが補完される答えまでの周期が異なっており、せかせかと短い周期であわただしく問い-答えサイクルを生きている筆者に対して、おっとりとした沢谷さんは、一つの周期が回るのに長い時間をかけているのであろう。それゆえ、本来ならば筆者の問いかけは沢谷さんによって呼応されるはずであるのに、自分の周期性の中でさっさとその呼応関係の収束に向かってしまっている筆者は、沢谷さんによる呼応を待たずに、自分で答えを見つけてしまう。

こうした周期性の違いが、いわゆるテンポの違いとして顕在化し、沢谷さんにしてみれば、投げかけられた問に向き合おうとした瞬間に今度は答えをぶつけられるような戸惑いが体験されたかもしれない。筆者にとっては、尋ねたのに返答を期待できないような、暖簾に腕押しをしているような空虚な感覚が残る。

10 中田は、「先生」という小学生による呼びかけが、教師の「なんですか」という言葉によって補完されて初めて、「先生」という言葉は、教師に対する呼びかけになる、と指摘している (cf. 中田, 1994)。このように、他者へと向けられた言葉は、他者に補完されて初めて自らの意味を完成させることができるのだ。

2) 密度の違い

周期性の違いは、物理的に一定の時間の中に、類似の構造を何回入れ込むことができるか、という違いになる。それゆえ、密度や濃度の違いとして感じられる、ともいえる。先のキャッチボールの比喩で述べれば、筆者にとってはすでにキャッチしたボールを投げ返し再びキャッチして、というような反復を終えるまでの時間に、沢谷さんは一投目を静かにキャッチしているのであり、その長い滞空時間のあいだ、ただボールを待っている沢谷さんは、ボール以外のどこにも向かうことのない、密度の薄いリズムの中にあるように見受けられる。上述した空虚な感覚というのは、この濃度や密度の薄さに関係しているのではないだろうか。

こうした薄さは、おとなしい、控えめ、物静かで、どこかぼんやりしている、という沢谷さんの印象と関係しているように見える。ぼんやりしている、という印象を例に考えてみたい。例えば休み時間、多くの生徒が教室内をうろうろと動き回るのに対し、沢谷さんは、皆に背を向けて自分の席につき、背筋をすんなりと伸ばして、じっと前を見つめていることが多い。そのようなときに「何をしてるの?」と話しかけると、「えっと…、何もしてないです…」と、首を傾げながらも静かに答え、そして困ったように小さく笑う。何もしていない、ということがどういうことかよくわからず、「何か考えごとしてるの? それとも、何も考えず、まっしろな感じなの? 無の境地?」と尋ねたことがあった。沢谷さんは首を傾げ、「…えっと…」と考え込んでから、「特に、何かを考えてはないです…」と答えてくれた。

このことから、沢谷さんのリズムの構造には、余白ともいえる、何もしていない時間があることがわかる。とはいえ、沢谷さんは、「何もしていない」という時間を積極的に生きているようには見えない。筆者に問われて答えに迷ったり、「考えてはない」というような否定形でしか語れないことからすると、ぼんやりと何もしていないように筆者の目には映る時間は、沢谷さん自身にとっては、意識の対象とならないような、意識の周縁においやられている時間だ、と考えられる。「何もしていない無の時間」でさえないのだ。そしてこうした余白が、沢谷さんを、控えめでおとなしく、どこことなく線が細く儂い雰囲気させるのではないだろうか。

また沢谷さんは、上述の場面で答えがわからず途方にふてしまっているときも、そのわからなさを解消するために周りに質問をしたりしていない。先に、問いかけに対して答えが呼応することを指摘したが、わからなさもまた、その解消とセットになっている。「わからない」という認識は「答えはなんだろう」「どうすればわかるだろう」といった問いとなって、問題の解決へと向かう。ところが沢谷さんは、これまでの考察から考えると、質問したいがタイミングがつかめず質問をしなかったのではなく、「わからないからわからう」という動きの中にいなかった、とも思われる。比喩的に述べれば、ボールを投げたいと感じたり、実際に遠くに向けて投げ出したりしておらず、足元に落としたり、周囲から「投げなさい」と言われるがゆえにしかたなしに前に放り出している。沢谷さんの学習の姿は、そのようにも見受けられる。

3) 情感の違い

テンポがゆっくりで、しばしば密度の薄いリズムで生きている沢谷さんは、しかしながら、一緒にいると、不思議と心穏やかにしてくれる人だ。例えば窓辺の小さな花が、それ自体はひっそりと静かに控えていて色濃く主張してくることはなくても、どこか穏やかで心和ませる情感を伝えてくれるのにもそれは似ている。

音楽でいえば音色に、視覚的なものでいけば色合いにあたるようなこうした情感は、ソファネにならえば、リズムの構造の一つとして捉えることができる。しかしながら、情感がどのように規定されるか、本稿ではまだ考察するに足る準備が整っていない。リズムの情感の問題を検討していくことを、今後の課題の一つとしたい。

3 教育学におけるリズム論の意味

ここまで、人間のリズムとは何かを、哲学的な議論や、筆者自身の体験から考察してきた。では、こうしたリズム論は、教育学的に出来事を捉えるうえで、どのように有用だろうか。最後に試験的に、リズムという観点から捉えることで、子どもたちの何が明らかになるのかを、一つの事例をもとに検討したい。

3-1 リズム構造の脆さ

ここで例として取り上げたいのは、リズムの構造自体が脆いと考えられるケースである。軽度の知的障害がある富田さん（仮名）は、感情をコントロールしたり、周囲の他者に配慮して行動したりすることに課題を抱えている。富田さんのこうした課題は、富田さん自身のリズムがうまく機能しておらず、いわばとても脆い構造のリズムの中で生きているからではないか、と筆者は考えている。

そこで、富田さんの普段の様子がわかるいくつかの場面をもとに、富田さんのリズムを考えてみたい。

1) 予定外の事態に陥るパニック

次の場面は、富田さんと筆者が、前年度の教室に入って懐かしがっているときの様子である。教室の隣には相談室があり、富田さんは懐かしいと言いながら入っていった。

富田さんに続いて私も続いて入ると、相談室のテーブルをはさんで向かい合わせに座る。相談室は4人がけのテーブルがある狭い部屋で、そこに私たち二人だけで入ったのは初めてだったので、お互いなんだか照れくさくなって、ふふふと笑い合う。「女子会だ～」とふざけたり、「面接を始めますよ」と言っているかめしい表情をつくったりする私に、富田さんはけらけらと笑っている。〔略〕「あ、富田さんいた、良かった！」とA先生が入ってくる。「なーに、遠藤先生と二人？」とA先生のげげんな様子に対して、富田さんと私は、「女子会だよ！」と楽しそうに答える。そのにぎやかな声に反応したのか、「僕も入れて～」と笑いながら男性のB先生が相談室に入ろうとした。A先生も笑い、「女子会だから、B先生はだめ～」と言って相談室のドアを閉じかける。狭い空間に三人で閉じ込められるかっこうになりかけた、その瞬間、富田さんは全身をこわばらせ、恐怖で目を見開き、悲鳴に近い声で、「え、やだ」と声をあげた。富田さんの言葉が聞こえるか聞こえないかの一瞬のうちに、A先生は様子を察し、ドアをさっと開く。再び開放的な空間が広がり、A先生はいつもの落ち着いた口調で、「富田さん、そうそう、連絡ね。C先生がね…」と、淡々と事務的な連絡事項を伝え始めた。富田さんは、その様子にほっとしたように肩の

力を抜き、いつものだらんとした格好に戻って、「えー、うん、そうだよ」とぶっきらぼうにうなずいた。

この場面で富田さんは、自分が予想していないタイミングで相談室のドアが閉じることに驚き、パニックに陥りかけている。A先生がその様子をすぐに察して対応したために、難を逃れられたが、何かが一つ違っていれば、激しく泣き出すことも、また場合によってはそのまま数時間かたくなに固まってしまうことも、考えられた。

相談室は、担当の心理士や担任教員と生徒とが面談に用いる部屋である。富田さんにとって、A先生と筆者と三人で相談室にいるということは、未経験の、しかも本来はありえない状況であった。「女子会」と言い合ってふざけているときにテンションが高いのも、こうしたイレギュラーなものに対する反応だったと考えられる。筆者もまた、未知の状況で富田さんがともすれば不安になるのではとなんとなく感じ、過剰に楽しい雰囲気をつくりだしてふざけている。そのような下地があるところに、空間が閉鎖されてしまうという事態が起きた。これが富田さんのパニックの要因だった、と考えられる。

このことからわかるのは、富田さんは、予定外の変化に対応できない、ということである。一見すると他愛のないただのふざけ合いであったのに、なぜこれほどの対応のできなさに陥るのだろうか。この点を考えるために、富田さんのリズムを、ソヴァネのリズム論を参考にしながら検討したい。

2) 周期性の短さ

次の場面には、富田さんが自分で副会長に立候補した生徒会の集まりに対して、気が乗らない様子が描かれている。

昼休みに、生徒会の集まりがある。副会長の富田さんは、朝から「今日は生徒会か」と憂鬱そうだ。A先生と、同級生の生徒会長と、三人で昼休みに会議なのだ。昼休み、昼食を自分の席で食べ始めると、それまでの楽しそうな様子からうってかわって、のろのろとした動作が目立つ。背中を丸めて、上目遣いに、前方の時計を見上げる。「絶対間に合わないよ」とブツブツ言いながら、

昼食のトルティーヤをもそもそと口に運ぶ。「それ、おいしい？」と私が気を引き立てるように明るく尋ねても、暗い表情のまま、うなずくだけだ。生徒会の始まる12:50になったが、それに合わせるように富田さんの食事のペースは遅くなる。このままではやがて、止まってしまいそうな勢いだ。

毎週ある曜日の昼休みには、生徒会の集まりがある。定期的なこの集まりを、しかしながら富田さんは、毎回、憂鬱そうに語る。集まり自体は数十分で終わるものであり、また実際に集まりが始まれば、楽しそうにはしゃぎながら取り組んでいるように見えるが、毎週木曜日の朝になるとリセットされたように憂鬱そうになり、昼休みには昼食が進まなくなってしまう。

先週もその前もさらにその前も、特に問題なく、楽しく過ごせたのだから、少しずつ慣れて大丈夫になっていくとか、そういった変化が富田さんにはほとんど見られない。いってみれば、木曜日の昼休みの数十分の活動を含んだ一週間を、一つの周期性の中で捉え、毎週同じようにやってくる乗り切りうるものとして割り切ることができない。つまり、富田さんのリズムの構造は、この活動をうまく彼女自身のペースに取り入れられない、と考えられる。

その理由の一つとして、富田さんは、一週間という長期間を反復するあるまとまりとして感知することができないからだ、ということが考えられる。多くの場合人は、毎年、毎月、毎週、毎日といったしかたで、長期的なまとまりから短期的なまとまりまでを入れ込構造的に複合的に感知できる。しかし富田さんは、もちろん概念としては「毎年」「毎週」という言葉を理解しているが、それらを、あるまとまりのあるものとして感覚的に捉え、まとまりの反復として経験を重ねていくことが難しいのではないだろうか。富田さんは、毎分、毎時間といった短い周期性の反復で過ごしているため、生徒会の集まりという憂鬱な取り組みは、毎週、新しく富田さんを脅かすものして現われてくる。そのようにも考えられるのである。

3) 構造の脆さ

前項では、富田さんの周期性の短さが、富田さんの不安定さ、未知のものへのパニックの起きやすさの要因ではないか、と考えた、もう一つの要因と

して、ここで、リズムの構造そのものの脆さを考えたい。

放課後、テーブルカーリングというゲームを、2人の先生と3人で遊ぶことにした富田さん。ところが、じゃんけんでチーム分けをすると、2人の先生が同じチームで、富田さんはひとりぼっちというチーム編成になってしまった。その圧倒的に不利な状況に、富田さんは、「いや」と小さく悲鳴を上げて私に駆け寄り、突っ立ったまま、涙をぼろぼろこぼしながら泣き始める。さっきまであんなに楽しみにしていたのに、と私が残念に思っていると、先生たちは苦笑しながらも、気を利かせて、「じゃあ、先生たち同士で組むのは、なしにしようか」と提案する。「僕と組もうよ。前にそれで勝ったしさ」。もう一方の先生の言葉に、それまで泣いていたのがウソのように富田さんはびたりと泣き止み、表情をゆるめる。そして、もう私の方は見向きもせず、げらげらと笑いだしながら先生の方に戻っていき、「だってさ、この間、私と先生が組んだとき、私、すごい玉投げたし」と、はしゃぐように主張する。

この場面のように、はしゃいでいたと思えば泣き出したり、また笑いだしたりするといったことは、富田さんにはしばしば見られる。まず目につくのは、富田さんのこうした感情の入り乱れ方である。特に、げらげら笑いだすという彼女のふるまいは、唐突なものとして筆者に感じられた。

筆者はこのとき、肩透かしをくらったような気持ちになった。おそらく筆者は、パニックになった富田さんの気持ちを鎮めたり落ち着かせたりするべく、心を整えていた。また、せっかく上機嫌で始めたゲームでパニックになってしまった富田さんを痛々しく感じており、なんとか機嫌が直せないだろうかとも思っていた。筆者は、いってみれば、富田さんを励ますというゴールに向かって自らの身を投じていたと考えられる。

ところが富田さんは、筆者のそうした在り方には目もくれない。筆者の身の投げ方に呼応しない富田さんの在り方が、唐突なものとして筆者に富田さんを感じさせ、感情が安定しないさまとして強く記憶に残った、と考えられる。

先に述べたように、人はあるゴールに向かって自らを投じる。自らを投じてはそれが受け止められ、また新たに自らを投じてはそれを受けとめる、と

いう形で、リズムはある構造（形）になっている。ところが、富田さんのふるまいからは、彼女がこうした呼応関係の中では生きていないように見受けられる。

すると富田さんは、リズムの構造そのものが、少なくともこの呼応し合うという形に関しては、脆いと考えられるのではないだろうか。このように考えてみると、富田さんが変化に対してパニックに陥り、短い周期の中で反復を繰り返そうとすることも、説明がつく。構造そのものが非常にもろく壊れやすいからこそ、なるべく小さい周期でそれらを反復することで富田さんは何とか日々の時間を過ごしているのであり、少しでもそこに変化が帯びれば、富田さんのリズムの構造はその変化に耐えられない。富田さんの在り方を、このように捉えることはできないだろうか。

3-2 リズムで捉えること

前節では、富田さんという生徒の一見すると不可解に見えるふるまいを、リズムの観点から捉えるという試みをした。リズムの構造が何なのか依然として曖昧な中で、富田さんのリズムが、十分に解明できたとはいえない。しかしながら、リズムとして捉えることで、富田さんの次のような在り方が見えてくる。

感情が安定せず、周りに対して年齢相応の適切な気配りができない富田さんは普段からトラブルメーカーであり、教師の手を煩わせることが多い。遠足などの行事が入ると、自ら参加したいと言うにもかかわらず、直前になると行きたくないといってしばしば泣いたりすねたりして、より一層、教師を困らせてしまう。しかも、最終的には参加するのが常である。そのため、同級生たちも、「どうせまたいつものでしょ」と、半ば呆れたような対応にならざるをえない。

しかし富田さん自身にしてみれば、いつもリズムが脆い状態の中にあって、リズムによって支えられるということが難しいのではないだろうか。多くの人にとって休日続きなどでリズムが崩れたような状況と同様の混乱のさなかに、富田さんはいつも置かれ続けており、彼女自身の感知、把握できる短いまとまりをひたすらに繰り返すことで、なんとか日々の生活を維持している、

とも考えられる。まとまりが短いからこそ、過去になした決心を忘れたかのように、未知の状況に対して怯えたり不安になったりしてパニックを呈したりすることがあり、また、パニックを呈したことが嘘だったかのようにけろりとしていることも起きる。富田さんの在り方は、リズムの観点から捉えればそのように見えるのであり、そうであるならば、富田さんの言動は筋のおったものとして受け止めることができる。

このように、周りからすればわがままや努力不足として捉えられたり、障害というラベルのもとでくくられてしまう子どもたちは、リズムという観点から捉えなおすことで、その子ども自身に固有の姿として描き出すことができるのではないだろうか。そして、描き出すことをとおして、その子自身について私たちが考えることができるのではないだろうか。リズム論は、こうした教育的な試みに寄与してくれるもの、と思われる。

終わりに

本稿では、人間の言動の背後にあつてそれを促すものとして、リズムについて考えてみた。リズムはすでに膨大な研究の蓄積がある一方で、リズムとは何なのかということさえいまだに明確にならない問題である。しかし、教育的な他者理解に役立つという観点からこの試みを続ければ、個々の子どもに即して、その人固有のリズムを描くということが可能になるのではないだろうか。そしてそれは、他者理解に一つの道を与えてくれるのではないだろうか。

リズム論を研究するうえで欠かせないベルクソンの考察も含め、いったいリズムとは何なのか、本稿はその考察の端緒を切ったものにすぎない。人間のリズムとは何か、現象学的な検討を重ねたい。

付記 本稿に事例の記載を快く許可くださった学校関係者の皆様に、心よりお礼申し上げます。

文献

- ・馬場朗(2000)「音楽表現と『自然』としての感受性—ルソーにおける音楽模倣論」『美学芸術学研究』17・18号, 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部美学芸

術学研究室 編 ,pp.89-112

- ・ アンリ・ベルクソン (2002) 『意識に直接与えられたものについての試論』 筑摩書房
- ・ ドゥルーズ (2010) 『千のプラトーン 中 --- 資本主義と分裂症』、河出書房新社
- ・ 國分功一郎 (2017) 『中動態の世界 意志と責任の考古学 (シリーズ ケアをひらく)』、医学書院
- ・ ルートヴィヒ・クラーク (2017) 『リズムの本質 新装版』 杉浦實 (翻訳)、みすず書房
- ・ 中田基昭 (1994) 『授業の現象学』、東京大学出版会
- ・ ルソー (2016) 『言語起源論——旋律と音楽的模倣について』 増田真 (翻訳)、岩波書店
- ・ Sauvanet ,Pierre (2000) Le rythme et la raison, 1 tomes, Kimé,
- ・ 山崎正和 (2018) 『リズムの哲学ノート』 中央公論新社

ABSTRACT

A trial of phenomenological consideration of rhythm For pedagogical human understanding based on rhythm theory

Noyuri ENDO

This study is a preliminary clarification for introducing rhythm theory as a viewpoint of human understanding. This paper gives an overview of previous research on rhythm, clarifies some elements of human rhythm based on author's own experience, and try to examine the pedagogical meaning of introduce rhythm theory into human understanding.

Studies by Rousseau, Klages, Deleuze, and Sauvanet have revealed that the rhythm that conveys human emotions to others is a cohesive structure (unit) or a repetition of similar shapes. A unit in rhythm has a structure that can be grasped as shape, and the shape is changed by movement, but is repeated periodically. However, the distinction between rhythm and proximity concepts such as beat, time signature, and tone does not have any common view.

A trial to clarify these rhythms in human activities in this paper showed the following two points. First, human internal rhythms resonate and repel external rhythms such as music, art works, and others. From empirical facts such as the deviation and harmony felt with the rhythm of others, differences in tempo, density and emotion can be considered as components of human rhythm.

Based on the above considerations, this paper tries to describe a young

woman whose emotions and behavior are unstable from the perspective of rhythm. According to this study, her behavior that seems incomprehensible arises from the short periodicity of rhythm and the fragility of the structure. And this is a fruit of rhythm theory for human understanding.